

## 【投稿論文】

長野県の文化施設におけるアート・マネジメント人材の教育カリキュラム開発  
—茅野市民館・美術館との協働事業「往来と創発」による実践型教育

鳥山香織

## 【要旨】

本研究は、全国最多の文化施設を保有する長野県において、アート・マネジメント人材育成の実践型教育カリキュラムの開発を目的としている。本稿は、縄文文化や御柱祭の文化が息づく茅野地域において、茅野市民館・美術館を対象に、これまでの事業分析と実践研究結果をもとに実践型教育カリキュラムを検証した。

第一に、地域性や文化施設に応じた教育カリキュラムの開発手法を示し、アート・マネジメント人材育成の段階を分類した。

第二に、茅野市民館・美術館の施設特性とこれまでの自主事業等をもとに、特徴と課題を分析した結果、駅と隣接する施設特性を活かした実験的なイベント実施、戦略会議の質の向上、新しい客層の開拓が明らかとなった。

第三に、映像・音楽・ダンスの3部門で「基礎演習講座」と「実践発展プログラム」からなる教育プログラム「往来と創発」実践研究成果を報告した。

最後に、地域性や施設特性に応じたカリキュラム開発には、多種多様な専門家による教育プログラムが提供できる総合大学の役割は大きい。地域においては、異文化の者へ地域生活・文化を体験的に伝え、新たな文化芸術活動へつなげる環境整備が重要である。

キーワード：文化芸術 アート・マネジメント 文化施設 教育カリキュラム開発

## 1. はじめに

近年、文化施設<sup>註1)</sup>は、美術・音楽・演劇等の発信や生涯学習の場だけではなく、アートを通じてコミュニティ形成や地域特性の発信など地域振興の中核になる<sup>1)</sup>と期待されている。それには、中身の濃い事業と広く市民へ還元することが課題となっている。

大学等では、文化施設において、多様な文化芸術活動を支援する高度な専門性を有するアート・マネジメント<sup>註2)</sup>人材を育成するためのカリキュラムの開発・実施が求められて

いる<sup>註3)</sup>。アート・マネジメント教育には、「受講者の経験格差、情報格差、自主事業企画必要度の違い、担当する会場規模の違い、地域特性の違い、会館における職位の違い」を踏まえた、実践的で応用可能なカリキュラム開発が重要と言われている<sup>2)</sup>。文化施設ごとに、アートとの関わり方、アートを通しての地域社会との関わり方が異なるため、それに応じたアート・マネジメント人材のスキルを見極め、養成する教育プログラムが必要となる。しかし、日本におけるアート・マネジメント研究の歴史は浅く、アート・マネジ

ント教育に関する実践研究の蓄積が少ないのが現状である。

長野県は、芸術や歴史、民俗、産業、自然科学などを扱う博物館および博物館等施設数が全国最多で、音楽や演劇など舞台芸術を扱う施設も46と13番目に多く、有数の文化施設保有県となっている<sup>註4)</sup>。松本市では「サイトウ・キネン・フェスティバル」のような大規模で国際的な音楽祭が毎年開催され、市民による公民館活動も盛んに行われている。茅野・諏訪地域では諏訪大社の御柱祭が有名で伝統的な文化行事として受け継がれている。

文化芸術における潜在力が高く、市民の文化芸術に対する目が肥えており、地域ごとに独創性ある文化芸術を発信していくことが文化施設経営の鍵となる。そのためには、文化施設ごとに現状と課題を把握し、実践の中で特徴強化や課題改善のための知識・技能を習得・向上し、事業後に確認・評価する必要がある。アート・マネジメントには、文化芸術、経営、舞台技術の多様な知識・技能が要求されることから、多種多様な講師陣による教育プログラムが必要である。筆者は、信州本学の総合大学としての強みを活かし、異分野横断でアート・マネジメント人材育成に取り組む実践的な教育カリキュラム<sup>註5)</sup>をつくりたい。

本研究は、長野県において文化施設のアート・マネジメントの現状と課題を明らかにし、地域性や施設特性に応じた実践型教育カリキュラムの開発を試みる。本稿では、茅野市民館・美術館の過去の事業をもとに特徴と課題を分析し、H25年度文化庁の補助を受けて実施したアート・マネジメント人材育成事業<sup>註6)</sup>の実践研究を報告する。

## 2. 教育カリキュラムの視点

今年度は初年度ということもあり、文化芸

術を広く扱った実践的な教育カリキュラムを実施した(図1)。茅野地域の文化芸術に関する特徴と課題の抽出・共有を行い、国際・先端的な視点で教育カリキュラムを検討する。総合的アート・マネジメント教育の実施と検証、実施内容のドキュメンテーションを行い、茅野市民館・美術館が長野県の文化芸術における拠点となることを目指した。

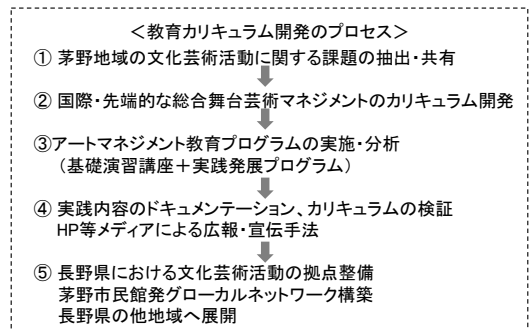


図1 教育カリキュラム開発のプロセス

「アート・マネジメント ハンドブック」によれば、アート・マネジメント人材に必要なとされる基礎的素養は、芸術・社会・創造現場・経営に分類される<sup>註7)</sup>。ここでは、音楽・映像・ダンスの芸術・創造現場領域の素養と、文化芸術分野における国際情勢を理解し、社会領域の素養を高め、アート・マネジメント人材育成を段階的に行う(図2)。最初は、異文化や国際情勢を取り入れることで、



図2 アート・マネジメント人材の育成段階

文化芸術における多角的視野を持ち、地域の文化を客観的にとらえる文化芸術マインドの養成を図ることに重点を置く。次に、専門知識・技能の習得・向上し、関係団体と連携を図って事業を実施するスキル向上を図る。そして、文化政策を踏まえ地域性や独創性ある事業企画や運営するスキルの向上を目指す。

### 3. 茅野市民館・茅野市美術館の特徴と現状課題による教育カリキュラムの検討

#### 3-1. 茅野市民館・美術館の特徴

茅野市民館・美術館（当館）は、市民館と美術館、図書室、アトリエやレストラン等が備わっており、ホール機能、美術館機能、コミュニティ機能をもった文化複合施設である。建設前から、基本構想を市民や学識経験者を交えたワークショップを実施して検討するなど、市民の主体性を重視した施設となっている。当館の施設は、茅野駅と接続しており、南北に長い図書室が駅通路とホール、美術館をつないでいる。駅利用客が電車までの時間つなぎに図書室を利用したり、駅入口のイベントスペースの活動を見たりと、駅利用客にも利用しやすい施設デザインとなっている。

当館は、茅野市の指定管理を受けた株式会社地域文化創造が管理運営を行っており、他にNPO法人のサポーター組織が文化芸術の参加機会を増やし、文化芸術の基盤づくりを推進している。年度を超えて計画的な事業展開や専門職の配置による自主事業の企画運営と貸館管理事業を中心とした技術相談体制の充実を目標としている。

ホール部門は、全事業の役1割が自主事業である。自主・共催事業は、初年度から徐々に増加しており、H24年度は134事業となっている（表1）。3年目以降は、市民企画事業が増えており、市民への文化芸術の場の提供を図っているが、無料の事業が増えており、文化芸術の普及や育成が目的となっている。また、5年目以降から、学校や地域文化施設でのアウトリーチ活動も行っており、継続事業も大幅に増えている。文化芸術の振興を幅広い層に広く定着させる事業展開を図っている。また、平成27年には開館10周年の記念事業が企画されており、節目を迎えるための盛大な事業を計画している。

#### 3-2. 文化芸術に関するスタッフの問題意識

2008年の公立文化施設調査により、現職者

表1 自主・共催事業の概要

年度／項目	自主・共催事業*1（回）				継続事業（回）	入場者数*2（人）
	総数	入場料あり	市民企画	アウトリーチ		
H17年度	34	16	なし	なし	-	13,089
H18年度	20	12	1	なし	なし	11,903
H19年度	43	22	14	1	8	20,617
H20年度	80	29	23	なし	19	25,057
H21年度	119	33	31	6	50	24,920
H22年度	122	25	55	14	70	27,180
H23年度	120	19	58	10	77	20,370
H24年度	134	23	61	9	67	27,719

\*1 茅野市民館提供資料を基に算出。市民館主催・共催事業と美術館企画展・常設展事業を加算。同事業や継続事業を別日に実施したものは別数として加算。

\*2 入場者数は茅野市民館提供資料を基に算出。記録分のもの。

におけるマネジメント人材育成研修に関するニーズが明らかになっている<sup>註8)</sup>。これらニーズを踏まえた上で、当館スタッフを対象にアート・イベントのマネジメントについての個人の問題意識についてアンケートを行った(表2)。アンケートは自己記述式で、当館スタッフ9名を対象に1週間の回答期間を設けて直接配布回収(回収率100%)を行った。

アート・イベントのマネジメントに関する個人の問題意識は、アート・マネジメントそのもののあり方についての知識・経験の不足が挙げられた。また、参加者属性に偏りがあり、参加者が固定化している様子が伺える。地域ニーズを的確に把握し、より幅広い市民に文化芸術に触れる機会を増やすことが課題となっているようである。それには、文化芸術の専門知識を得る機会や地域へ還元する事業運営が課題と考えられる。

信州本学との協働事業を実施する上で取り組みたいことの意向をヒアリングした(表

3)。ヒアリングは、当館スタッフへ2回(計12名)実施し、当館スタッフとサポート組織、コアアドバイザー等が参加して次年度の事業を決める「事業企画会議」(計16名)に参加して意見収集した結果である。施設開館より8年目をむかえ実績を積み重ねていることから、実験的な事業への期待や、10周年記念事業を盛り上げる企画が望まれた。一方で、新しい事業をやることより、既存事業のレベルアップや茅野地域の縄文文化、日常生活から文化芸術を創出することなど、これまで以上に事業に深みを持たせた、質の向上が課題となった。また、本事業の対象は、当館スタッフだけでなく、サポート組織や市民サポーター、近隣の文化施設スタッフなど、オープンな形で教育プログラムを実施することや、地域企業や商店街、自治体等との連携による事業展開が望まれており、文化芸術の視点から地域振興を図るための体制づくりや人的ネットワークのつなぎ役としても期待されていた。

表2 アート・イベントのマネジメントについての個人の問題意識(自己記入式アンケート) ※9名分

アート・イベントのマネジメントとはどのようなものなのか、どんなことが可能なかを把握すること。その上で地域に求められていることと地域が提案したいことのバランスを取りながらアート・イベントを考えられたらいい。
課題についてはほとんど全てにおいて。アート・イベントを知らない若い人・子供たちに参加・関わってもらうことができたらいいなと思います。
イベント全体として発信するメッセージの統一感がある状況を整えることができたら良いと思います。参加者(市民を含むアーティスト全員)のモチベーションが最後まで維持するためのマネジメント。
事業の参加者が固定化している傾向がみられるので、より多くの方々に参加して頂けるような取組が必要と感じています。10~30代の若者が参加する事業の拡充。
課題: 予算の調達。市民ニーズへの企画内容。
理念: たくさんの地域住民が参加し、アートに関わる喜びや感動を共感できるイベント。
「アート」という単純化できない価値をいかに伝えることができるのか、その方法がまだ数少ないと思うので、それぞれの表現・テーマに沿った方法を見つけたいです。
「アート・イベント」についての知識・理解が少ないこと。地元活性化につながって、地域にとっての利益のあるものになったらよいと思う。
課題: 人の名前が覚えられない、肩書きに興味がない。この課題は未だ自意識にとらわれているため。
理想: 自然体によるアート・マネジメント。
まだよく分からない。

表3 信州大学との協働事業への意向（ヒアリング）

茅野市民館は、パブリックな部分で確実に実績をつくってきており、規模的にも実験ができる場だと思う。
10周年プロジェクトを盛り上げる企画がほしい。
日本のパブリックな劇場におけるマネジメントに希薄さを改善するためにも、実践の中で人材を磨いていかなければならないという問題意識を常日頃から感じていた。今回、日常やるべきことをステップアップさせて、力を合わせていくことができるといい。
何か新しいことをやるというのではなく、今までやっていたそれぞれの会議の質を上げていきたい。未来に向かって事業をやっているのだから、その材料となる会議の質を上げたい。
茅野のダンスを考えると、身体表現がフォームに偏っている。もう一度、茅野の縄文から暮らしに立ち戻って、地域自体の身体表現方法を見つけていく必要がある。
映像に特化した事業はこれまであまりしていない。シネコン以外で映像作品をやりたい。映像作品のパフォーマンス型を協働でやってみたい。
今回のプロジェクトの対象者①茅野市民館スタッフ、②地域サポーター、③周囲の劇場関係者とし、館としてできればオープンなカタチで実施し、希望者を受け入れていきたい。
茅野の企業との連携の可能性を探したい。
自分たちが過去に経験したように、文化芸術で世界が変わる体験をしてほしい。

### 3-3. 教育プログラムへの反映

教育カリキュラムは、当館の特徴と課題を踏まえ、文化芸術の各分野で施設を最大限に生かし、実験性あるコンテンツを実施することとした。

加えて、当館が実施している事業の戦略会議に国内外の専門家やアーティストが参加し、専門的知見を提供することで質的向上を図る。国内外の専門家や本学教員がもつ人的ネットワークとコンテンツを提供することで新たな客層の開拓を試みる。この他、地域住民に広く還元・普及するため、市民サポーターの参加を呼びかけ、セミプロの養成を念頭に基礎講座と実践を取り入れた教育プログラムを検討することとした。

## 4. 往来と創発＝対話と協働から生まれる信州型舞台芸術マネジメント教育プログラム

### 4-1. 「往来と創発」の目的

本事業は、茅野・諏訪地域が有する地域・文化と茅野市民館という空間・施設を活かして、独創的・国際的視点で舞台芸術をマネジメントする人材を養成することが目的である。

本事業コンセプト『往来と創発』は、舞台芸術の「非日常」の経験と「日常」を往来することにより、日常生活へのシナジー効果を期待している。茅野市民館が茅野駅へ接続している特徴を活かし、「時空を超える通路」と見立て、日常から非日常へ様々な芸術表現が往来する装置と位置付けている。また、当館を拠点に本学教員や国内外専門家・アーティストが往来し、受講者と対話を繰り返し、協働で事業を進めることでカリキュラムを実施することを試みている。

講師は、ダンサー、振付家であり国際的な舞台芸術事業に関わる北村明子准教授（人文学部）が総合プロデューサーとなり、大学教員と招聘講師が連携し、3部門の事業を進める。展覧会キュレーション等を行う金井直准教授（人文学部）が広報・ドキュメンテーションを行い、関係団体への周知も行う。高瀬弘樹准教授（人文学部）は受講者を対象に、教育プログラム実施前・中期・終了後に心理的变化を分析することで習熟度とカリキュラムを検証する。鳥山香織助教（産学官連携推進本部URA）が人的ネットワークの構築と事業管理、カリキュラム検証を行うことで、

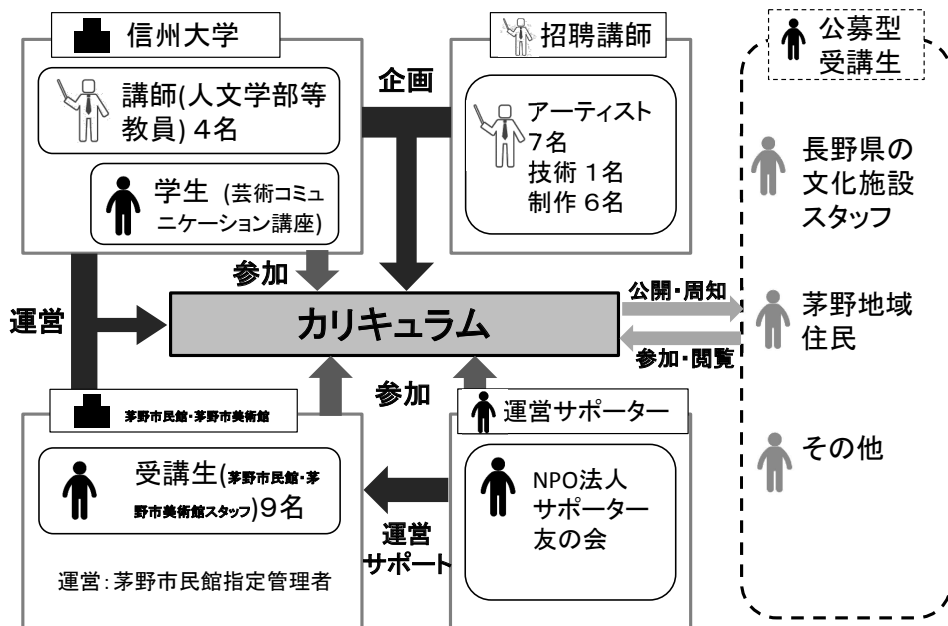


図3 カリキュラム受講体制

本学教員の専門領域を反映したプログラムになっている。

カリキュラム受講対象者は当館スタッフ9名とし、市民サポーターのスキル・技能向上を目的にサポーター組織、本事業に興味がある市民スタッフ約20名も対象とした(図3)。また、Web等で講座日や内容を公開し、近隣の文化施設へチラシ等で情報提供し、興味ある者には、受講生として参加できるように公開した。

#### 4-2. 基礎演習講座と実践発展プログラムによる教育プログラム

本事業では、舞台芸術を広く扱い、「映像」「音楽」「ダンス」の3部門を実践的に事業運営することとし、各部門で、イベント当日“ハレの部分”を「実践発展プログラム」、そこに至るまでの企画制作会議や準備等を“見えない部分”「基礎演習講座」とした。教育プログラム内容は、1. 企画、2. 人的マネジメント、3. 空間マネジメント、4.

宣伝・広報活動、5. クリエーション・プロセス(1)、6. クリエーション・プロセス(2)、7. グローバルサポート、8. 公演実施、9. 成果報告と分類した(表4)。本年度は事業実施期間が短かったこともあり、公演等の企画は、各部門で専門知識をもつ信州大学人文学部教員と本事業制作チーム招聘講師が行ったが、具体的な進め方については部門ごとの基礎演習講座で検討した。宣伝や広報活動は特設HPを開設し、本学広報室の報道機関とのネットワークも活用した。5～8は部門ごとに招聘講師と実施内容が若干異なり、それぞれで本学講師と招聘講師主導でクリエーションしていった。これにより、舞台芸術マネジメント全般に対する基礎的な知識・技能と実践的なスキル向上を図った。

(1) 映像部門：ドキュメンタリー映像上映  
「老いの時空」「バリの光と影」

基礎演習講座①は、専門家・村尾静二氏と当館スタッフを中心に、専門家と当館スタッフの顔合わせと、「記録を残す」メディア手

表4 教育プログラム内容と方法

教育項目		内 容	方 法	
映像・音楽・ダンス部門	基礎	1. 企画	コンテンツ制作、予算策定、プロジェクト・マップ作成 等	事業期間が短いため大学教員（北村、鳥山）と本事業制作チームで企画、招聘講師による当館スタッフへのレクチャー
		2. 人的マネジメント	アーティスト・スタッフ交渉・スケジュール管理 等	大学教員（北村、鳥山）が実施体制を整備し、招聘講師、制作スタッフと当館スタッフとの連携を図る
		3. 空間マネジメント	会場、地域連携等プラン策定、自治体・関連活動団体との交渉 等	コンテンツを表現する会場設営、自治体への協力依頼、市民参加企画会議への大学教育の参加による協力、地域利用などによる連携
		4. 宣伝・広報活動	広報戦略策定・広報媒体作成 等	本事業制作チームと当館スタッフによる広報戦略会議、パンフレット、HP、SNSの作成、報道機関・情報案内先リスト共有、本学教員（金井）による文化行政、類似施設への周知
		5. クリエーション・プロセス(1)	作品マップ作成・プレゼン・公演までのスケジュール 等	本事業制作チームと招聘講師、当館スタッフにより、部門ごとの実施
		6. クリエーション・プロセス(2)	舞台空間、劇場条件・法規等確認、舞台美術設計・プランニング、舞台図面作成（照明・美術）音響・映像オペレーション体制確認 等	部門ごとに、招聘講師、本学教員（北村）で当館スタッフを牽引して実施
		7. グローバル・サポート	海外人材招聘・派遣計画立案、出演・派遣交渉、受入れ組織との交渉、ビザ申請、航空券手配、宿泊・滞在手配、送迎 等	アーティストアテンドは招聘講師、制作チームが当館スタッフを牽引して、部門ごとの実施。ビザ、宿泊先等の手配は大学と制作チームが実施
	実践	8. 公演実施	スタッフスケジュール合わせ、劇場入り管理、座席設定（消防法・立ち見）、受付セッティング 等	事業関係者全員で部門ごとの実施
	基礎	9. 成果報告	支払い、清算、報告書提出 等	大学教員（北村、鳥山、高瀬）、招聘講師を中心に実施し、当館スタッフへの報告を行うことで事業確認と次年度以降へのフィードバックさせる

法について、また、映像人類学の視点による「老い」について講座を行った（表5、写真1）。②では、専門家・酒井氏によるフィールドワークを基にしたアーカイブなどの映像制作手法について講座を行った。講座による専門知識提供の後、映像アーカイブスに関する当館の過去の取組みについて意見交換を行った。これらの結果を受けて、「老い・映像人類学・アーカイブス」をテーマにした実践発展プログラムと進め方を検討した。この他、イベントまでにTV会議等で打合せを重ねた。

実践発展プログラム①は、インドネシアの

ワヤンクリ（影絵人形芝居）のダラン（語り部）である老人の日常のドキュメンタリー「老いの時空」上映と、映像人類学の専門的知見や映像制作の手法についてレクチャーを行った。マルチホールの3面スクリーンを使い、異世界を演出した。インドネシアの絵画やパティックなどの作品を展示したミニギャラリートークを行い、参加者が実物に触れることで異文化理解を深めた（写真2）。また、同期間中、「寿齢讃歌－人生のマエストロ－写真展Ⅷ」を美術館で開催しており、老いをテーマにしたイベントを同時期に開催することで事業に統一感を持たせた。②は、バリの



写真1 【映像】基礎演習講座 顔合わせと意見交換



写真2 実践発展プログラム①「老いの時空」



写真3 【音楽】基礎演習講座 リハーサル



写真4 実践発展プログラム『Anabiosis Passage-蘇生路』

地域性や伝統芸能としてのワヤンクリをフィールドワークした映像「バリの光と影」上映と、撮影対象との関わり方や映像を撮影するプロセスを考えるレクチャーを行った。PCを複数使い、同時多角的に映像を見せた。上映会の舞台レイアウトや作品展示の準備や撤収作業の人出が不足していたが、市民サポーターの協力が得られ、ワヤンクリの雰囲気伝える光と影の空間が完成した。

(2) 音楽部門：『Anabiosis Passage-蘇生路』

マルチメディア音楽コンサート

基礎演習講座①は、招聘講師・森永泰弘氏との顔合わせと、日本ではまだ聞き馴染みの少ない「サウンドデザイン」について講座を行い、音がストーリーや映像や舞台などの情景さえ変革創造できるファクターであること

を紹介した(表5)。(2)では、一般参加も募り、世界各国でのフィールド・レコーディングによる音源採取や音楽と映像を組み合わせた実例をもとに、サウンドデザインの効果と可能性についてレクチャーした(写真3、4)。

実践発展プログラムは、『Anabiosis Passage-蘇生路』をテーマに、インドネシアで録音した音、現地音楽家とのレコーディング・セッションとインドネシア音楽の再構築を試みたサウンドデザインによる、環境音とエレクトロニクス、弦楽カルテットとピアノ、インドネシア音楽家Endah Laras氏とのマルチメディア音楽コンサートを行った。①は当館でのリハーサル、②は公演日とした。来場者95名となり、在日インドネシアの観客もあり、新しい集客層が得られた。一方、招聘講



師の滞在先として、地域住民と生活を共にしながら、海外アーティストや県外招聘講師が茅野地域の文化に触れる機会を望む声があった。予想外の収穫として、同時期、美術館では「美の往来」開催中で、ロビーでは「茅野市美術館アート×コミュニケーション+信州大学『文谷友佳里 往来する線』」を公開しており、「往来」をテーマにしたイベントが同時多発的に行われていた。「往来」のコンセプトが定着し、当館やアーティスト、それぞれの解釈によって事業展開されていったと考えられる。

(3)ダンス部門：『Emotional Strata-記憶の往来』マルチメディアダンスパフォーマンス基礎演習講座①は、アーティストと当館スタッフ、本学人文学部芸術コミュニケーション講座の協働で、イベントにむけての周知と集客を目的に、金井圭介氏と学生によるプレ・ダンスパフォーマンスを行った(表5)。アーティストの呼びかけがあり、音楽部門と同時期で、本学の別事業や美術館「美の往来」と連続性を持たせ、茅野駅と当館ロビー等で周知を行った。②では、北村の人脈で、シンガポールを中心にアジアの舞台芸術で活

表5. 基礎演習講座と実践発展プログラムの実施

	講座・内容	招聘講師	日時	場所	参加者
映像部門	基礎演習講座① 映像人類学、アーカイブ及びドキュメンタリー—映像について、事業打合せ	村尾静二氏 (映像人類学)	H25年7月28日(日)	会議室	7名
	基礎演習講座② 実践発展プログラムに向けた制作準備	酒井耕氏 (映像企画・制作)	H25年8月28日(水)	マルチホール	17名
	実践発展プログラム① 『古い時空』上映 ドキュメンタリー映像上映とレクチャー ※茅野市民館『寿齢讃歌—人生のマエストロ—写真展Ⅷ』	村尾静二氏 (映像人類学)	H25年9月22日(日)	マルチホール	73名
	実践発展プログラム② 『バリの光と影』上映 ドキュメンタリー映像上映とレクチャー	村尾静二氏 (映像人類学)	H25年12月8日(日)	アトリエ	49名
音楽部門	基礎演習講座① メディア技術を駆使した音楽創作について、最新の国際事情を含めた講座、事業打合せ	森永泰弘氏 (サウンドデザイナー)	H25年9月5日(木)	会議室	8名
	基礎演習講座② 『サウンドデザインとは』レクチャー	森永泰弘氏 (サウンドデザイナー)	H25年10月3日(木)	コンサートホール	24名
	実践発展プログラム① 『Anabiosis Passage-蘇生路』マルチメディア音楽コンサート 準備		H25年11月21日(木)		-
	実践発展プログラム② 『Anabiosis Passage-蘇生路』マルチメディア音楽コンサート ※常設展『美の往来』 ※茅野市美術館アート×コミュニケーション+信州大学『文谷友佳里 往来する線』	森永泰弘(サウンドデザイナー)、エンダ・ララス(ヴォイス)、他	H25年11月22日(金)	コンサートホール	95名
ダンス部門	基礎演習講座① マルチメディアパフォーマンス、ダンスワークショップ ※信州大学芸術コミュニケーション講座共同開催	金井圭介(ダンス企画・サーカスアーティスト)	H25年10月30日(水)	茅野駅東西通路、茅野市民館ロビーとその周辺	-
	基礎演習講座② シンガポール、アジア・欧州の舞台芸術に関するレクチャー	Neo Kim Seng (プロデューサー)	H25年12月9日(月)	アトリエ	16名
	実践発展プログラム① 『Emotional Strata-記憶の往来』マルチメディアダンスパフォーマンス 準備 ※信州大学芸術コミュニケーション講座共同開催	金井圭介(ダンス企画・サーカスアーティスト)、兼古昭彦氏(映像監督・制作)、山田咲氏(ドラマトウルグ)、横山裕章氏(音楽・演奏家)	広報 H25年11月24日(日)、 H25年12月24日(火)	茅野駅東西通路、茅野市民館ロビー、マルチホール	-
	実践発展プログラム② 『Emotional Strata-記憶の往来』マルチメディアダンスパフォーマンス ※信州大学芸術コミュニケーション講座共同開催		H25年12月25日(水)		-



写真5 【ダンス】基礎演習講座 Kim氏と対談

躍するプロデューサー・Neo Kim Seng氏との対談を行った。創作・制作の立場からコンテンポラリー・ダンスの活動紹介と、アジアの舞台技術をどのように仕立てているかなどの意見交換を行い、世界的な視野で舞台芸術を考える機会を得た。

実践発展プログラムは、『Emotional Strata-記憶の往来』をテーマにマルチメディアダンスパフォーマンスを行った。学生とアーティストが絵画や彫刻、縄文文化から得たインスピレーションでダンスの動きをつくる茅野でのオリジナル作品である。茅野駅通路から当館通路・ロビー・劇場へとダンサーと共に観覧客が移動し、日常生活で利用する場と非日常を体感する場を舞台としている。日常生活の場を舞台とすることで、文化芸術は日常の中から起こるもので、文化芸術の境界を決めている意識の存在に気づくといった問題提起が含まれている。

## 5. 教育カリキュラム検証

### 5-1. 受講者と招聘講師等による感想・意見

音楽部門の教育プログラム終了後、中間評価として当館スタッフに教育カリキュラムについての感想・意見を聞いた。また、招聘講師や自治体に対しても感想・意見を収集した(表6)。今後のアンケートで部門ごと等の



写真6 実践発展プログラム『Emotional Strata-記憶の往来』

詳細を聞く予定のため、本稿では事業の全体的な感想・意見から教育カリキュラムを検証した。

受講者からは、アジアを中心に専門家やアーティストを招聘したことで国際交流事業として幅が広がったといった意見や、専門的知見が入った対話や、既存事業と関連づけた事業を行ったことで、深い理解を得たといった好感触を得ている。詳細な結果についてはアンケートも踏まえて分析したい。この他、3部門を連続的に実施し、報道機関にも数回取り上げられたことで、県内の文化施設関係者の目に触れる機会も増え、関心が高まっているという反応が得られた。

本事業に参加した専門家や招聘講師からは、文化芸術に興味がない地域住民の関心を引く工夫や周辺地域の文化芸術団体を巻き込んだ事業企画と活動の展開が望まれた。また、外部から専門家やアーティストが来て活動する際に、イベント当日だけのアプローチではなく、一時的にでも地域生活に触れることで茅野地域の文化理解を深め、芸術活動へ反映させたいといった意見があり、滞在型の文化芸術活動の場が求められた。

自治体においては、本事業の周知や茅野駅通路を使用する際にも協力を頂いた。

表6 教育カリキュラムについての感想・意見

受講者の感想・意見
<p>講師のアーティストの人選がよく、基礎講座で物事の根幹を対話できたので深い理解が得られた。</p> <p>国際交流事業は少なかったので、いい機会をもらい、事業の幅が広がった。</p> <p>自主事業「寿齢賛歌」と共同事業にしたことで、「記録」から「発展」へと一歩踏み込んだ発想を持つことが出来、次のステップが見えた。</p> <p>長野県内の文化施設関係者の注目されるようになり、関心が高まっている感触がある。</p>
専門家・招聘講師の感想・意見
<p>文化芸術に関する地域住民の関心を高めること、文化芸術に興味がない住民に対して興味を持ってもらう取り組みや、情報発信が重要。</p> <p>周辺地域で文化芸術活動に関わる人・団体を巻き込んだ活動がもっとあると良い。</p> <p>茅野市へ来たときに、イベントをやって終わりではなく、レジデンスなど滞在型で地域住民と交流できる場があるといい。</p>
自治体・関係団体の感想・意見
<p>茅野市民館やサポート団体が自主企画事業を実施するなど、積極的な活動を行っており、今後も幅広い活動を期待している（茅野市）。</p>

## 5-2. 小括

教育プログラムの実施と受講者や専門家・招聘講師の感想・意見をふまえた教育プログラムの検証結果を以下にまとめる。

1. 企画…本学教員と制作担当講師が企画したが、部門ごとのコンテンツはアーティストと当館が対話により決めた。部門やアーティストにより「往来」の解釈が多様で、施設特性とも合い、発展性あるテーマとなった。インドネシアなどとの文化交流の場となった。
2. 人的マネジメント…招聘講師は北村の人脈から選定し、当館スタッフと基礎演習講座やTV会議等で対話を重ねたが、関係者が多く、スケジュール管理が課題となった。
3. 空間マネジメント…部門ごとに会場を複数使用し、茅野駅通路から施設ロビーや中庭など全館を実験的に使用し、集客を図った。
4. 宣伝・広報活動…制作担当と当館で広報戦略会議を行い、特設HPやパンフレット等を作成した。イベント告知には本学広報や当館の報道機関・類似施設ネットワークを活用して周知し、当館や茅野駅周辺でアーティストによる周知活動も行い、広報範囲を広げた。

しかし、周辺地域も含め、広く地域住民の関心を集めるコンテンツと広報が課題となった。

5. クリエーション・プロセス(1)…制作担当中心に作品マップやフライヤー、来館者へのアンケートを作成し、当館と共有した。
6. クリエーション・プロセス(2)…部門ごとに招聘講師と当館スタッフ、本学教員で舞台設営を行った。今後技術的課題を収集する。
7. グローバルサポート…アジアのアーティストを招聘し、複数事業を同時進行で実施したこともあり、アテンドやスケジュール調整の人員が不足した。
8. 公演実施…各部門とも当館スタッフの迅速なイベント運営体制により、事業を実施することが出来た。映像部門の仕込みで人出が不足したが市民サポーターの協力が得られた。
9. 成果報告…報告書作成や事業評価、次年度への還元は今後実行予定である。

## 6. まとめ

本稿は、茅野市民館・美術館の特徴と課題を明らかにし、アート・マネジメント人材育成事業の実践研究から、地域性や施設特性に

応じた教育カリキュラムを検証した。

### (1) 教育カリキュラムの開発

茅野市民館では、従来の戦略会議の質を高めるため、文化芸術における専門的知見が望まれた。また、施設特性を活かした実験的なイベントの実施や新たな客層の開拓が期待された。文化施設の特徴を踏まえ現状の課題を解決するため、多種多様な専門家が必要となる。総合大学として、分野横断的なカリキュラム開発を進めていく。

今年度はアート・マネジメント人材の文化芸術マインド形成に注力した。今後は、専門知識・技能の養成、経営・企画の要素も加え、習熟度を分析するための評価軸を設定し、教育カリキュラムを定量的に検証する。

### (2) 教育プログラム

実証研究の初年度ということもあり、映像・音楽・ダンスの3部門で、「基礎演習講座」、「実践発展プログラム」による教育プログラムを作成し、舞台芸術全般の基礎的な知識・技能と事業運営における実践的なスキル向上を図った。

茅野市民館では、宣伝・広報の工夫や、クリエイションでの市民サポーターの協力が必要となった。今後も継続して、より多角的なコンテンツの提供や地域を巻き込んだ事業展開をしていきたい。

### (3) 文化芸術の拠点整備

招聘講師の地域文化理解を目的に、地域生活に入り込める滞在型の交流場所が求められていた。文化芸術活動を支える環境整備も重要である。文化芸術の往来を活性化するために、異なる文化をもつ者が、地域生活を体験することで新たな文化芸術が生まれることを期待したい。

謝辞：関係資料を提供いただいた茅野市民館・美術館、株式会社地域文化創造各位に感謝いたします。また、事業に協力していただ

いた招聘講師、茅野市民サポーターの皆さまに御礼申し上げます。

### 【註釈】

- 註1) 文化施設とは、劇場、音楽堂、美術館、博物館等を含めた文化活動を行う施設とする。
- 註2) アート・マネジメントは、「文化芸術の振興に関する基本的な方針（第3次）について（答申）」によると、「広義には、文化芸術と社会をつなぎ、文化芸術の社会普及を図ること、狭義には、文化芸術活動の管理・運営や文化芸術団体の組織経営、そのために必要な知識・技術、方法論（企画、マーケティング・資金調達、営業・渉外・広報等のスキルやノウハウなど）を指す。」ここでは、包括的な意味として扱い、広義・狭義を含めてアート・マネジメントとする。
- 註3) 文化庁「大学を活用した文化芸術振興事業」、文化庁HP、[http://www.bunka.go.jp/geijutsu\\_bunka/12daigaku/katsuyo.html](http://www.bunka.go.jp/geijutsu_bunka/12daigaku/katsuyo.html) 大学等によるアート・マネジメント人材育成を目的とした補助事業がH25年度より創設された。
- 註4) 文部科学省「H23年度社会教育調査」統計表「博物館調査」より算出
- 註5) 本稿では、アート・マネジメント人材育成のための課題抽出から事業の評価・検証までのプロセスの総称を「教育カリキュラム」、そのための具体的な基礎演習講座、実践発展プログラムを「教育プログラム」とする。
- 註6) 本学では、北村准教授（人文学部）をプロジェクトリーダーに、平成25年度文化庁「大学を活用した文化芸術振興事業」の採択を受け、『往来と創発＝対話と協働から生まれる信州型舞台芸術マネジメント教育プログラム』を実施している。筆者は、本事業管理とカリキュラム開発を担当している。公式サイト<http://chino-orai.com/index.html>
- 註7) 参1) 『アート・マネジメント概論』、「アートマネジメント・ハンドブック」p15、(1) 人材の基礎的素養からみたアート・マネジメント概念で、「アート・マネジメント人材が学ぶ必要のある基礎的科目から素養を引き出し、芸術・社会・経営・創造現場の4領域」に整理されている。
- 註8) 参1) 『アート・マネジメント概論』、「アートマネジメント・ハンドブック」p17、マネジメント人材育成研修に関するニーズ：①芸術文化環境に関する知識、②企画・制作・実施に関する知識・経験、③経営・経理・営業・マーケティングに関する知識・経験、④公演制作、劇場・ホール運営に関する知識・経験、⑤一般的な知識・能力がある。

### 【参考文献】

- 1) 社団法人 全国公立文化施設協会、2012、「アート

- マネジメント・ハンドブック」
- 2) 文化審議会、2011、「文化芸術の振興に関する基本的な方針（第3次）について（答申）」、平成23年1月31日、文化庁、p84
  - 3) 小山光彦、美山良夫、1998、「アート・マネジメント教育の展開－慶應義塾における教育と研修の現場から－」、慶應義塾大学アート・センターBooklet 3、pp32-42
  - 4) 美山良夫、2004、「大学院アート・マネジメント教育の目的と課題－カリキュラム・モデル構築をめざして－」、慶應義塾大学アート・センターBooklet 11、103-115
  - 5) 竹内晋平、2011、「日本におけるアート・マネジメントの現代的諸相－「空間」と「時間」の共有を視点とした公共性の検討－」、佛教大学教育学部論集、第22号、pp97-106
  - 6) 三橋純予、2010、「アート・マネジメント手法による「他者」を想定した複合的鑑賞教育の系統的構造と分析－北海道立近代美術館との連携授業プロジェクトからの考察－」、美術科教育学会誌 (31)、pp353-366
  - 7) 三橋純予、2008、「アート・マネジメントという新たな領域の考察－ミュージオロジーのネクストステージとしての美術教育の可能性－」、美術科教育学会誌 (29)、pp525-537
  - 8) 横坂康彦、2009、「地域音楽試論－アート・マネジメントの視点から－」、新潟大学教育学部研究紀要、人文・社会科学編1 (2)、pp205-212
  - 9) 野中和孝、吉野信一、建石久美子、2007、「イブニングライブを通して見えてくるもの－長崎県美術館におけるアート・マネジメントの試み－」、活水論文集、現代日本文化学科編50、pp68-57
  - 10) 納谷和孝、志村秀明、赤堀弘幸、黒崎かをる、島田修佑、松島裕司、2010、「大学と文化センターとの連携講座による地域資源単語帳の開発」、日本建築学会技術報告集、第16巻、第32号、pp315-320
  - 11) 茅野市民館・茅野市美術館、<http://www.chinoshiminkan.jp/index.htm>

(受稿日 2013.12.25 掲載決定日 2014.1.22)

(とりやま・かおり／信州大学産学官連携推進本部)

## **Integrated Curriculum Building of Arts Management in Nagano Pref.**

**-An attempt of art management on the Chino Cultural Complex/Chino city Museum of Art.**

Kaori Toriyama

### **【Abstract】**

The purpose of this study is to integrate curriculum building of arts management in Nagano Pref. This paper is a report of research at the Chino Cultural Complex/Chino city Museum of Art (Chino). Chino is a special facility adjacent to the station. So, people come and go. Chino had been planning the event in the local initiatives. However, development of new customers was a challenge.

We conducted our education programs 'Basis exercises' and 'Practice program' of three field (Films/Music/Dance). The concept of "Road", theater becomes a passage to travel through time and space. The "Road" means that the time and people come and go by Art. Event design with the expertise of culture and art was the problem in Chino. In addition, development of new customers was also the problem. We thought curriculum construction in accordance with the facility characteristics and local culture is important.

University can be carried out educational programs by various experts. It is necessary to accept the region who have different cultures, to develop a base from which to create a new culture.

**Keyword** Culture art, Arts management, Cultural center, Integrated Curriculum Building